

「仁政」に對峙する西鶴

——『本朝二十不孝』と『懷硯』の「諸国」——

有 働 裕

一、野間氏の西鶴像（二）——『本朝二十不孝』の執筆動機

戦後の近世文学研究をリードしたのは暉峻康隆氏と野間光辰氏という二人の大先達であったが、野間氏が故人となつて早くも二十余年、暉峻が亡くなつて八年ほどの歳月が経過した。とはいへ、この二人の業績を読み返すことから始めなければ、研究の入り口に立つことができないという状況は、今日においても変わりはない。いや、入り口どころか、あれこれと新たな調査と思案とを重ねたつもりで文章化したものが、よくよく読み返してみれば先の二人の手のひらの上を徘徊していたに過ぎなかったという経験を持つ研究者は、われわれの世代には少ないのではないか。

とはいふものの、よく知られている通り、この二人の西鶴観は大きく隔たつており、様々な場面で反駁しあつてゐた。もちろんその対立は学問上のことに限られ、戦後の近世文学会の発展はまさにこの二人の協力と信頼関係の下になされたといえ

る。だがそれにしても、両者が抱いていた「井原西鶴」という作家の像には、大きな開きがあつた。暉峻康隆氏の豪放磊落ともいふべき西鶴像は、その代表的著書『西鶴 評論と研究』上下二冊（注¹）などで十分に語りつくされている。また野間氏の西鶴像も、『西鶴年譜考証』（注²）をはじめとする様々な著述の中に綴られている。そして野間氏の記述からは、暉峻氏とは対照的な、やや屈折した暗い影と鬱積した感情とが感じられる。たとえば、『本朝二十不孝』に対する見解を見てみよう。貞享三（一六八六）年十一月の刊記（序文は貞享四年正月）を持つこの作品は、徳川綱吉による孝道奨励政策の最中に親不孝者の話ばかりを集めて刊行されたが、氏はこれについて次のように述べている（注³）。

西鶴が親不孝咄といふテーマを選んだのには、やはり西鶴らしい時代や社会に対する感想が根柢にあつたと思うふ。といふのは、度々繰り返していふやうに、儒教主義の権化ともいふべき將軍綱吉が、これより先天和二年（一六八二）

三月、駿河国今泉村の農民五郎右衛門の至孝を旌表して、

儒臣林大学頭信篤をしてその伝を作らしめ、同年五月には諸国に令して世にいはゆる「忠孝札」なる高札を建てさせ、

ついで天和三年七月將軍政治始に發布する慣例の「武家諸法度」には、歴代將軍の前例を破つて、「文武忠孝を励(ま)し、可(レ)正一札儀ニ之事」の一条を第一条に掲げるなど、丁寧懇切に孝道を奨励し、反復人民を教諭してゐるのである。西鶴はこの聖人君子面をぶらさげてゐる將軍の二重人格を、町の生活の中でぢかにそして鋭敏に嗅ぎつけ、むしろ反感を抱いていたのではなかつたかと思ふ。「天下様」に対する町人の反感や反撥は、よし痛切な実感であつたとしても、その自由な表現が許されなかつたこと、勿論である。だからこそ表面には「孝にす、むる一助ならんかし」と謳ひながら、孝道奨励とは逆行する親不孝咄を集めたのである。それは決して、単なる趣向の突飛さ、説話の興味だけに止まるものではない。

強まりつつある恐怖政治への危惧。欺瞞的な政策に対する憤懣。ついに「書く」という行為を通して、自らの思いを表出せずにはいらなかつた西鶴の姿が想起できる。

このような理解については、氏自身もその恣意性を指摘されかねない不安を感じていたようだが、それ以上に「反撥する西鶴像」が氏の内面では確固たるものとして存在感を保っていた。本稿の目的は、そのような野間氏の理解を手がかりに、西鶴作

品を今日読み直す意義を再考するところにある。

二、野間氏の西鶴像(2)——西鶴第五書簡

先のような野間氏の思いは、他の文脈の中で突然噴出することもある。西鶴の残した手紙のうちの、所謂「第五書簡」と呼ばれるものに対する見解がそれである(注4)。

この書簡は肥前鹿島藩主鍋島直条の備忘録『塵塚』に書き留められていた、大坂の医師真野長幸(字長澄)に宛てたもので、日付は記されていないものの、野間氏はこれを貞享五年三月執筆であろうと推定している。

此ごろの俳諧の風勢 氣に入不申候ゆへ やめ申候

嘉太夫ぶしの上るりに うき世をなぐさみ申候 以上

尚々鑑くら新蔵芝居に能子共出中候

人は何ともいへ たつや能子にて候 以上

西鶴

月 日

長澄様

かつて『俳諧大矢数』の成就の折には「日本第二」(延宝八年・第二書簡)と自らの俳諧を誇っていた西鶴が、近年の俳諧の傾向が気に入らないのでやめることにする、という冒頭部分に関して、野間氏は次のように述べる。

西鶴をして、俳諧をやめさせたものは何であるか。西鶴は

「此ごろの俳諧の風勢（情）に入不申候ゆへ」といつてゐるが、実は、一種の都会風俗詩ともゆふべき談林俳諧にとつて、最も興味ある觀察の対象であり、誌想の源泉であり、素材の宝庫でもあつた社会の情勢の変化が西鶴の氣に入らぬ故に、俳諧をやめざるをえなかつたのである。端的にいへば、延宝末年から天和・貞享に至る、深刻な不景氣と不安な世情が、談林俳諧の生命とする戯諧と哄笑を奪ひ去つてしまつたのである。天和調の一時の流行は、いはばその一つのあらはれである。しかし多くの俳諧師は、この前後から俳諧と絶縁して、俳壇から全く姿を消し去つた。（中略）俳諧の風勢が二変して氣に入らぬものとなつたとすれば、その根源は実は世情の不安と危機にありとしなければならぬ。氏は續けて、天和・貞享こそは五代將軍綱吉の治世の初期、所謂「天和の治」の時期であつたことを指摘する。つまりここでも、綱吉という恐怖政治家の出現によつて、鬱屈し憤懣を蓄積していく西鶴像を野間氏は読み取つてゐるのである。野間氏の理解は、その後積極的に肯定・継承されていつたわけではない。また、今日読み返してみると、いささか唐突な印象を与える文章でもある。

三、野間氏の西鶴像（3）——その背景

先に引用したような野間氏の見解を、仮に恣意的なものとな

定するなら、何が氏をそうさせたのであろうか。いささか横道にそれるようではあるが、あのような西鶴像をあえて提示しなくてはならなかつた理由が、野間氏の側にあつたと考へてみることもできる。

昭和十一年九月、日本諸学振興委員会が文部省に設置された。その目的は、「国体・日本精神に基づき学問の各分野に互つてその内容方法を研究批判し、我が国独自の学問文化の創造発展に貢献して延て教育の刷新に資」することにあつた。様々な学会や講演会を開催していたが、昭和十六年度からは「大東亜戦争下本委員会の使命の愈々重きを加へたる」ことから、さらに事業は拡大され、『日本諸学』という機関紙を刊行することになった（注5）。そんな中、昭和十七年五月に奈良女子高等師範学校講堂で開催された「国語国文学特別学会」において、野間氏は「都の錦の悲劇」という発表を行っている。

筆者架蔵の『日本諸学』第二号（昭和十七年十一月発行）には、西尾実氏（当時は東京女子大学教授）の「国語国文学特別学会所見」が載つており、そこでは、すべての発表は「大東亜新秩序の建設といふ主題からいふと、肇国精神の史的発展として跡づけられるような言語事実・文学事実がまづ」論じられるべきだという立場からの、次のような批評が記されている。

野間氏の発表においては、さういふ片鱗さへ示されにかつた。討議の席上、私は氏の研究発表について、氏に都の錦の文学史的意義をどう考へてゐられるかをお尋ねし、併せ

て、近世文学研究諸家に、皇国文学の発展における近世文学の意義をどう考へるべきかをお尋ねせざるを得なかつた。(中略) 皇国精神の発展における近世文学の意義といふことについては、考へなくてはならない問題が遺されたまゝであつたやうに思れる。

また、同じ号の「国語国文学特別学会記」で、この事に関連して久松潜一氏は次のように述べている。

西尾委員によつて近世文学に關して如何なる意義を今日見出すべきかについて、野間氏の所論にふれて質問されたのは意義深きものがあつた。近世文学が戯作者的立場を以て書かれたものが多く、嚴肅な精神に乏しいと見ることも一つの見解である。

これらの記事のみからは実際の会場の雰囲気は把握しがたいが、この件について神保五彌氏は、「當時の『文芸春秋』誌上に、自分がその研究態度について発言したら、学会で失脚する人物が何人かいるという旨の文章」を書いてゐる「某博士」から、「かかる戦時下に江戸時代の作家などを」と野間氏が非難されたとき、自らや暉峻氏の辛い体験談とともに言及し、「それにしてもひどい時代であつた」と回想している(注6)。当時学界において重きをなしていた研究者たちが、「天皇に絶対随順し奉るみ民としての自覚は国文学の教学の根柢」(久松潜一「国文学の動向と課題」『日本諸学』創刊号)や「教育や学問は直接に敵を叩きつゝぶす仕事ではなく、むしろかゝる仕事の基礎

工事にほかならぬのであるが、同時にまたそれは大東亜建設の基礎工事でなくてはならない」(和辻哲郎「戦時教学の根本方針」同)といった、時局に迎合した発言を行つていた時代である。その彼らが、時局とは縁のない作家について研究發表したことを罵倒するのはいわば当然のことではあつたが、野間氏にとつてはまさに屈辱的であつたに違ひない。

敗戦を経過したとはいえ、このような体験からまだそれほど年数を経ておらず、しかも戦後民主主義社会も「逆コース」と呼ばれる動向の中にあつた昭和三十年代、自由な発言が出来ない恐怖政治に対する特別な思いが野間氏の中にあり、西鶴について述べようとするときに、この極めて実証的な学風の研究者をして思わず感情的にさせたという可能性は十分に考えられる。

ただ、そのような社会的・個人的な背景があつたとしても、野間氏の西鶴像を誤りであると断定する理由にはならない。そこにたどりつく思考過程がどうであれ、野間氏の結論そのものは是非の検討は別になされねばならない。

四、西鶴の創作の姿勢―カモフラージュ、「ぬけ」、寓言

野間氏の西鶴像がそのまま受け入れられなかつた理由の第一は、それを確実に証明する記述が残されていないことである。「本朝二十不孝」には、政策に対する批判は明言されてい

い。しかも、登場する親不孝者たちは、ほとんど全てが悲惨な末路を迎えている。西鶴がもし綱吉に対して強い反発や敵意を感じていたのであれば、出版取り締まり云々の事情を考慮したにしろ、それなりの書き方をしたのではないか、と思わずにはいられない。

というのも、西鶴以前の仮名草子に明確な例を見出すことができるからである。『葉師通夜物語（福斎物語）』（寛永二〇年刊）には、

侍は、物をたくはへぬ物と聞に、利分やすき借銀なされ、米たばひおき、しめ売被成 候を、また隣国に聞、いづくもおなじ事に、高直になり、天下太平なれば、猶さぶらひ欲心ありて、如此なり。人間は申すにをよばず、人倫に近き生類、牛、馬、犬、猫、鼠までも、飢饉になる。侍の金銀わきて悦び候へば、世界の者かなしみ死する。ことの外なる殺生をあそばす個とと、しもぐは申しける。

という記述がある。また、『浮世物語』（寛文四年以後刊）の卷三の二「侍の善悪批判の事」にも、「侍道にも良きは稀」として、次のような辛辣な批評がある。

目の前にては利口覚めきて表裡輕薄を繕ひ、利欲に傾き恩を忘れ、人を誇りて慈悲なく、親疎を言はず物を掠め取り、よき人を嫉み押倒さむとす。これらの奴原世に多く、恥をも知らず人目をも憚らず、主君に追従をいたし、家老の前にお鬚の塵を取り、様々諂へば、誠によき者と思はれ、程

無く出頭人にもなり、知行を加増せらる、

松田修氏のいうところの、「仮名草子における批判的リアリズムの系譜」^{〔注7〕}であるが、これ程の過激さを感じさせるものを『本朝二十不孝』の記述の中に見出すことはできない。

しかしながら、これらを根拠に野間氏の見解を恣意的なものと断定してしまうこともまた、安易にはできない。貞享年間という時代背景や西鶴の作家的立場が先の仮名草子の諸作者とは異なっており、表現における困難さ、カモフラージュの必要性はより高まっていたはずである。谷脇理史氏が指摘しているように、「天下にさはり申候句もなし」という延宝八年六月二十日付けの西鶴書簡の一言があるだけでも出版取締りを強く意識していたことは十分に推測でき、その裏に「西鶴が、単に綱吉や「御公儀」の施策に対するばかりではなく、より広く武家（とりわけ上流の武家）に対する反撥、面白からぬ気持ち」があった^{〔注8〕}とする可能性も十分に考慮する必要がある。

「カモフラージュ」に類似するものとして、「ぬけ」や「寓言」といった当時の俳諧手法や文学概念が想起されてくる。果たして、野間氏が言うような西鶴の「本音」は、「ぬけ」の手法や寓言論から証明しうるものであろうか。

談林俳諧の流行手法であった「ぬけ」は、そのものを表現面にはあらわに記さずに、余意としてそれと想起させる手法である。とはいっても、カモフラージュといった意識とは異質なもので、あくまで表現のおかしみを求めるものであり、謎解きの

な一面もあるが、言語遊戯的な範疇を出るものではない(注9)。となると、この手法から導き出せるのは、佐竹昭広氏がかつて展開した、『本朝孝子伝』という原探掘しの謎解きを楽しむ、という発想くらいではないだろうか。とても恐怖政治への憤懣といった性格のものにはたどりつけそうにない。

また、「寓言」という発想についても同様なことがいえる。老莊思想から展開した近世日本の「寓言」理解はさまざまに派生し、他に託して何かを述べるという本来の発想から転じて、いかに奇抜に表現するかという方向へと展開する。

そして、わが国における寓言説の展開は、表現の心底に何らかの心理を蔵した寓意性に重きを置いたものと、表現の珍しさに重きを置きおかしみや遊びの要素を重視したものとに大きく分化しいたとされる。西鶴の属した談林俳諧で論じられた文学理論としての寓言論はもっぱら後者であったという(注10)。また、寓言論を散文・前期戯作の創作方法として論じた中野三敏氏は、この二通りのあり方を、熊沢蕃山の影響を受けた佚斎樗山と中国の渾詞小説をふまえた清田儋叟の理解に代表させて説いている(注11)。前者が、あくまで虚をもつて実を勧めるために奇抜な表現を用いたものであり、そこに作者の「士大夫の世界」あるいは「第一文芸へも通じる意識と自負」が垣間見られるのに対し、後者は、徹底した表現主義を目指し、倫理性や道徳性を離れた慰み草としての性格を強く持つという。

前者の寓言観は、『本朝二十不孝』は教訓性や実用性を備え、

虚構性を駆使してそれらを奇抜に表現した譬え話であるとし、「教訓も慰み」とする長谷川強氏や勝又基氏の論稿の妥当性の論拠となる(注12)。一方、あくまで奇抜な表現を求めることを第一として内面性や倫理性とのかかわりを放棄したものを寓言とし、それを『本朝二十不孝』にあてはめるならば、当時の常識的倫理観に立ちつつ「面白おかしく語り、読者を楽しませ」ることに努めた「慰み草」ととらえるような、谷脇理史氏がかつて主張した「戯作説」に近い見解となろう(注13)。

いずれにせよ、「ぬけ」や寓言論の発想の内側で考える限り、野間氏の抱く西鶴像に対しては否定的にならざるをえない。その後の研究者が氏の説を継承しなかったのは、西鶴作品の叙述そのものに幕府に対する明確な反発を見出せないのと同時に、このような当時の常套的な創作手法や文学概念から考えても裏づけが困難であったからにほかならない。

もっとも、日本文学における寓言論は、源氏物語寓言論等々、中世以来の長い伝統を持ち、また近世期を通じて多岐にわたって展開していく。それを、俳諧と初期戯作についての先行研究の結論のみを利用して大雑把に二つのパターンで概括してとらえ、そこに西鶴作品を二者択一的にあてはめるのはあまりに乱暴であるかもしれない。篠原進氏によって、「寓言」の語により治世に対する屈折した批判精神を含ませて理解する刺激的な論稿が最近提示されたこと(注14)なども注目する必要がある。従来 of ステレオタイプの理解からは逸脱したこのような「寓言」

観が認められるのであれば、野間氏のような西鶴像も再考する意義があるということになる。とはいふものの、どのような「寓言」の理解の仕方がはたして妥当であるのか、現在の私には未だ判断が下せない。とりあえずは、問題点の明確化のために、旧来の二つの「寓言」の用法の範囲内にとどめて論を進めることとしたい。

五、西鶴の「毒」と「天和の治」

そもそも、研究者が文献上の用法から整理分類したような「寓言」観を西鶴が熟知しており、その理論を遵守して執筆を行っていたなどという保障はどこにもないといえよう。中村幸彦氏も、寓言論と西鶴との関連を論じつつ、「談林の寓言論で提出されたままの客観主義のみで片付けられない何かを持っている」「談林でも表現のみでなく、広い視野の寓言論があった如く、西鶴の浮世草子でも、作者の文学観や、人間観にふれないでは通れない処に達したのではなからうか」と述べている^{〔注15〕}。そのような「何か」の存在については多くの共感が得られるものと思う。

それゆえに、一時期は戯作説や「謎解き」説が全盛のように思われた『本朝二十不孝』研究も、それらとは異質なものを追究する論の系譜ともいふべきものに属するものが次第に数を増しているように思われる。

矢野公和氏^{〔注16〕}、箕輪吉次氏^{〔注17〕}、大久保順子氏^{〔注18〕}、篠原進氏^{〔注19〕}、杉本好伸氏^{〔注20〕}等は、それぞれのアプローチでこの作品に込められたアイロニーや批判を読み取ろうとしており、拙稿^{〔注21〕}もまたそれに属するもののつもりである。これらの内容については別稿において詳述した^{〔注22〕}ので省くが、その共通性を篠原氏のもっともわかりやすい表現で言うならば、幕府の孝道奨励策に対するある種の「毒」をこの作品は有している、という発想だといふことができる。

これらの論稿は、野間氏の論をどこかで意識しつつも、そのいささか感情的にも思える筆致とは異なった形で、すなわち、作品内部の詳細な分析によって根拠を見出すという方法を取り、それぞれに刺激的な解釈を提示している。その妥当性を証明するために今後必要なことは、西鶴の抱く幕政観、国家観といったものの裏づけであろう。それがなければ、「ぬけ」や寓言論などの既成の文学概念の理解を前提に反論され、西鶴が幕政に対して批判的な意識など持つはずはない、そんな発想は近代主義によるさかしらである、という従来固定観念の壁を前にして逡巡することが続くことになる。

とはいえ、西鶴の幕政や国家に対する意識などを明確に記した文書などあるわけではない。ならば、歴史学などの関連諸科学の新しい成果を踏まえながら作品そのものを再検討してみること、西鶴が幕府の政策とどんな姿勢で向き合っているのかを、実証的に浮かび上がらせることはできないものか。とりわけ、

いまさらながらではあるが、綱吉政権初期の政治状況や思想的状況の解明については、十分な目配りをする必要がある。

西鶴の生涯は、將軍綱吉の生きていた時期の内に納まり、綱吉が將軍となつてからの時期が浮世草子作者としての活躍期である。この五代將軍の治世の開始は、単なる個性的な君主の登場に止まらず、幕府の支配機構が実務中心の官僚組織に再編成されていく構造改革期にあたっている。綱吉の治世の間に三十四名もの代官が年貢延滞等の理由で処罰され、その結果ほとんどの代官がこの時期交代し、従来の世襲の代官から徴税官的代官へと転換したことなどはその証左である。代官に対して農政担当官としてのあり方、つまり、民といかなる関係を結ぶか、農業に精通した環境整備を行い「私」を排除し公正な直仕置き・直裁を行うか等が求められるようになり、それを実行する能力がなければ処罰されたという。また、老中として所謂「天和の治」をリードした堀田正俊その人自身が、戦国期の武勇を持つ譜代の家柄ではなく、文官出身者であった。

このような大きな改革が行われるに当たっては、当然の事ながら、その背景としてそれに対応した理念の提示というものが必要となる。延宝八年（一六八〇）の綱吉の將軍即位早々に代官に対して出された、「民は国之本」条目とよばれる全七条のものは、まさしく次のような第一条で始められている。

一、民は国の本なり、御代官の面々常に民の辛苦をよく察し、飢寒等の愁これなきやう申しつけらるべき事

これが、堀田正俊の発案によるものか、將軍綱吉自身の意思によるものかは判然としないようだが、これは単なる題目に止まるものではなかった。実際に領主が恐れおののいて、にわかに「救」の為に百姓に米などを与えたり、百姓が江戸まで訴訟に出掛けるといった事件が起きている。国というものが君主と分離され、民との三者のあるべき関係が意識されるようになったと受け取ることができる。

もちろん、このような条目の発布によって世間の認識が急に変つたわけではなく、むしろ社会構造の変化が、「仁政イデオロギー」ともいふべき発想を受け入れる時期に達していたことは、すでに多くの歴史学研究成果が実証している。

ただ、そのような「仁政イデオロギー」あるいは「国は民の本」という発想が、上は老中や幕閣、そして儒者などの知識人、領主や代官、はては百姓町人にまで、共通のテキストの読解あるいは講釈によって確立されていったという指摘がなされていることは極めて興味深い。それは、『太平記評判秘伝理尽鈔』をはじめとする太平記のさまざまな注解であつたという事実を明らかにした、若尾政希氏の論稿である（注²³）。

このような「仁政イデオロギー」という発想が顕在化してきた時期と、『本朝二十不孝』の刊行とは重なっている。いや、両者を重ね合わせて読むことでこそ、そこに西鶴の作家としての姿勢を見出すことができるのではないか。

六、「仁政」の下で—現実の把握と隠蔽

若尾氏は、先の条目が出る以前に、「民は国之本」なる語をキーワードとした農政論を山鹿素行が展開していたことを指摘している。寛文五年（一六六五）成立の『山鹿語類』五巻で「民生」を論じるにあたり、その最初に「民を以て国之本と為すを論ず」という編を設けて、まさにそこに根本理念がなくてはならないこと提示しているのである。また 熊沢蕃山も『集義和書』（寛文二年初版刊）の中で、「近年思ひの外なる凶事出来て身代うしなひたる人に、民の困窮せざるはなし。民は是国の本也といへり。天命のかゝる所也」（巻一六）と、近年改易された領主はいずれも国の本である民を困窮させたが故に天命に見離されたのだと述べている。若尾氏はそれらを詳細に検討した結果、これらが提示するあるべき代官像は、『太平記評判秘伝理尽鈔』の提示した以下のような指導者像—具体的には、楠正成の姿と重なるものであることを明らかにした。

凡そ郡司は郡の人民の歎を知りて此を止め：貧なる者をつくうを以て第一とする。民に飢たる色なきを以て政を善と欲する事なるに（巻一六）

上下遠して間に横謀あれば、万悪生じて国乱る、久しからずして亡ぶるもの也（巻三五）

人の司と成る者は行跡と謂と直になく候へば、郎従の意何と誡め候といへども、直くはなき物也。理非に誤り滞り有

れば、諸人大に苦むのみに非ず。下民恨を含む物也（巻三五）

素行や蕃山、佐藤直方らと幕府や各大名の人脈とのかかわりについてはあえていうまでもないだろう。また、新井白石が幼少時、自分の父が太平記の講釈を受けているのを傍で聞いたという有名なエピソードがあるが、書物だけでなく、諸芸能における『太平記』や正成物の流行、庶民層を対象とした太平記読みの盛行も十七世紀後半の顕著な現象であった。河内の国石川郡大塚村の庄屋であった壺井五兵衛の子孫への教訓書『河内屋可正旧記』にも太平記読みの影響は見られ、その幅広さを確認することができる。

ところで素行は、『山鹿語類』五巻で「民は国之本」であることを提示し、それに続けて具体的政策として、各地の政治の善悪を知るために巡察使を派遣すること等を挙げている。優れた聖人君主によって善政が行われる以上、諸国の実情調査は大前提であり、もし不正があれば罰し、善行は賞賛しなければならぬ。だとすれば、綱吉が將軍就任とともに始めた新しい治世を聖人による理想的なものと認めさせるために、全国に「忠孝札」を立てて信賞必罰を強調し、また、諸国巡見使を派遣して現状把握に努めたのも当然のことといえる。後の生類憐れみの令もそれとは無縁ではない。

天和の諸国巡見使は、「天和の治」を徹底する上で重要な役割を果たしたという。巡見使の報告内容について具体的に知り

得る資料である「九州土地大概」によれば、どの程度よい治世が行われているかどうか、「中之美政」「中之悪政」「悪政」などといったランク付けがなされ、この評価の中には孝子表彰についての記述もある（注24）。

こういった形で諸国の統治の状況が厳しく詮議されるのも、まさしく「太平記読み」の言説に影響された「仁政イデオロギー」の一作用といえよう。幕府の建前としてこれが堂々と示されているのであれば、松田修氏の言う「批判的リアリズム」からの批判もさほど困難なものではないということとなる。

しかしながら同時に、言うまでもなく、この「太平記読み」の政治論は危険性を含んでいる。楠正成というわかりやすい理想像が、武士層を越えて在野の教養人や民衆にまで浸透し、領主と民との関係意識Ⅱ「仁政イデオロギー」の形成に寄与したとするなら、理想と現実との乖離もまた明確となり、領主層に対する批判意識が必然的に発生する。当世を「有がたき御代」と賛美する可正でさえ、責務を実践しない領主層への批判的言辞を吐いているほどである。となれば、諸国巡見視が見てきた現実の悪政を幕府は何としても隠蔽しなければならない。

天和元年六月、僧一音というものが、所謂越後騒動のことを書き記して『越後記』としてまとめたことで八丈島へ流罪となつた、と『常憲院殿御実記』は記す。その内容は不明だが、「既にこたびつかはされし巡察使に、其所領の民訴状をさ、げ、（小栗）美作が虐政をなげくことも度々なり」といった記述か

ら、単にお家騒動のことだけでなく、内政と関わりのある情報であつたことが容易に想像できる。

また、宮武外骨も『筆禍史』で取り上げているが、天和二年四月、江戸山伏町の正木惣右衛門という巡見使に記録係として随行した者が、その際に見聞したことを二冊の記録にまとめ、その写本を売ったことで罪に問われた、と『御仕置裁許帳』に記されている。その写本の書名も内容も伝わっていないが、先の「九州土地大概」に記されていたような、諸国の内情を書き綴つたものであつた可能性が考えられる。このような事件の発生は、諸国の治政の実情に対する一般の関心の高さと無関係ではないだろう。

単なる事実の隠蔽にとどまらず、さらには、偽装も行われる。『本朝二十不孝』に先立つて貞享二年に刊行された藤井懶斎の『本朝孝子伝』は、諸国巡見使の報告や林信篤の作成した孝子伝との関わりが深い、一種の官製孝史伝という性格の濃い書物である。その中では、「九州土地大概」において「悪政」として非難されていた細川綱利が、慈悲深い領主として登場している（注25）。

七、『本朝二十不孝』と『懷視』——秩序なき諸国のありさま

これまでの『本朝二十不孝』の研究史における『本朝孝子伝』という書物に対する関心は、西鶴がこの書を意識していたか否

か、はたして典拠として用いたかどうかといったところに集中していた。だが、ここで考えてみたいのは、『本朝孝子伝』の刊行を含め、先のような、「仁政キャンペーン」の横溢する世の中全体を視野に入れて、『本朝二十不孝』と『懷硯』の作品世界を見直すことである。そうしてみると、誰の目にも明らかなことは、いずれも「諸国見聞」した有様を記す形式を取ながら、そこに描かれている世界があまりにもアナキーだということである。

たとえば、『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」の冒頭は、清水寺の西門から眺める京の町の様子を、「立ちつゝきたる軒の内蔵の気色、朝日にうつりて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豊なる御代の例」と、幕府の治世を賛美するかのような描写から始まる。しかしながら、それらに続いて描かれている京の街中の現実とは、その「朝日」が照らすことのない影の部分―貧困にあえぐ零細な生活者の姿である。そしてその一方で、「長崎屋伝九郎とて京中の悪所銀を貸出す男」が堂々と新町通四条下るに店を構えている様が語られる。この伝九郎の店こそは、「欲に目の見えぬ男達」が群がる、表の世界と裏の世界の裂け目、裏社会への通路であった。

このような、御政道に反した金儲けや浪費、善政の恩恵など全く期待できない極度の貧困、為政者からは罰せられることのない不孝者、報われることのない不運な親や孝行者たちが『本朝二十不孝』にはあふれている。

華美な衣装への浪費はとどまるところを知らず（巻一の三）、盗賊はその組織力を強化して町を荒らし（巻二の一）、博打も流行すれば「放埒組」も横行し（巻三の三）、漆の横領も行われる（巻三の三）。また、一方で庶民の貧困は極度に強調され、犯罪の原因にもなる。小判も見知らぬ熊野山中では心優しい少女が強盗殺人を思いつき（巻二の二）、鎌倉の才覚男も八十両を手に入れるために油売りを殺し（巻三の四）、越前敦賀の大湊では妻に先立たれた父親が子を捨てようとし（巻四の三）、松前の歴々の武士も惨めにやつれはてしまっている（巻四の四）。

そして、理不尽な不幸に襲われる人々の多さ。孝行娘の献身は無駄になり（巻一の二）、親の言いつけを守った孝行息子の兄は弟たちにより自害に追い込まれ（巻二の四）、何の落ち度もない富裕な夫婦が五人の娘に次々と先立たれて没落し（巻三の一）、飲んだくれの不孝息子に天罰が下ってもその後始末は親がするほかはない（巻五の二）。

これと全く対照的なのが、『本朝孝子伝』の世界である。以前にも指摘したことがあるが、『本朝孝子伝』今世部の孝子説話としての特異性は、貧困であることが孝行の美德を際立たせていることと、各説話の結末で為政者が孝行者を称賛し金品を下賜したと記すものが多いことにある（注26）。

極貧の中でも不平を言わず、自らの衣食は顧みず、そして、稼業よりも親に礼を尽くすことを優先する。そんな孝子たちを

描いた『本朝孝子伝』今世部の二十話中、国主等から表彰されたという話は十三話を占めている。中国説話の「二十四孝」のように「天運」が介入することはなく、良君によって行われる憐れみ深い治世が孝行者を救う。そのような「仁政」が実現している世界なのである。

これに対し、『本朝二十不孝』の世界では、不孝者に天罰が下るものの、親孝行な者も決して報われず、そこに為政者の介在はわずかな例外を除きほとんど見られない（注27）。

『懷硯』と『本朝二十不孝』との近親性は、一読すれば誰もが気づくことであろう。『懷硯』の刊行年は貞享四年、ほぼ同時期の執筆であると思われる、この作品の進行役とでも言うべき僧判山の旅の見聞記、すなわち諸国話形式をとっているという点でも共通している。何よりも題材面で、「孝行」「不孝」あるいは「家族」「夫婦」などの通底がみられることが注目される。それゆえに、箕輪吉次氏が、巻二の四「鼓の色にまよふ人」に綱吉の孝道奨励政策への西鶴の懷疑を見出し（注28）、井口洋氏も巻四の二「憂き目を見する竹の世の中」に、行き過ぎた忠義孝行への非難を読み取ったりする（注29）というのも当然のことといえよう。

類似性に今一歩踏み込んで言えば、先に述べた通り、為政者の目がほとんど届かない、アナキーな世の中の有様を描いたという点でも、『懷硯』は『本朝二十不孝』とよく似通っている。その中でも端的な例は、白昼に堂々と商人と僧とによる博

打が行われている巻一の二「照を取昼船の中」であるが（注30）、他の章においても同様の例は数多く見出せる。男伊達の乱暴狼藉が横行する（巻一の三、二の三、五の三）一方で、深刻な武家の困窮が描かれ（巻一の三、三の五、四の一、五の一）、農村では荒廃が目立ち（巻四の一、五の一）、商人は不正や犯罪的な行為に手を染める（巻一の二、二の一、四の一、五の一）。僧は墮落・破戒へと傾き（巻一の二、四の一、四の五）、華美な若衆風俗が流行する（巻一の五、二の五、五の五）。孝行の矛盾とそれが引き起こす悲劇（巻一の四、二の四、四の二）があり、怪異や奇跡が人の心を迷わしている（巻一の二、三の二、四の五）。

幕府によって禁じられている行為は横行し、また、「仁政」の下ではあつてはならないような人心の荒廃、都市や農村の困窮が描かれている、というのが『懷硯』の世界といえよう。

そして、そのような各説話を全体として緩やかにまとめているのが「伴山」という存在である。いわば彼は、さまざまな現実を反映した各説話を共鳴させ合うネットワークの媒介者であり、当代のありさまを浮かび上がらせる上で大きな役割を果たしているということができる（注31）。

また、この『懷硯』の世界を一話に凝縮したような一章が巻四の一「大盗人入相の鐘」であるということも、以前に指摘したことがある（注32）。越後の国の貧乏寺に六人の盗賊が押し入ったものの、盗むものも何もないので、その寺の吐雲という風

変りな僧に、酒を飲みながらのおの過去の語るという一話であるが、それぞれの経歴のユニークさもさることながら、士農工商と坊主に神主と、当時の身分を網羅するように、そして、さまざまな地域の人物に設定されていることが注目される。

八、結語 — 「仁政」と「諸国」の「世の人心」

十七世紀の半ばに普及した「仁政イデオロギー」的な発想には、戦国時代の天道思想と類似した要素が見出され、また、徳川幕府成立以降の儒教的要素も混入しており、その全体像は簡潔にはまとめがたい。また、この発想が一般化することを可能にした社会構造の変化の過程も複雑である。とはいえ、このような発想を具体化してくれる言説として、『太平記評判秘伝理尽抄』などの様々な太平記評釈書や、それらを活用する「太平記語り」の活発な活動が大きな影響力を持っていたことは確かであろう。それによって「仁政イデオロギー」の発想は、支配層から知識階級、そして庶民へと幅広く普及していった。

言うまでもなくこの発想は、為政者にとっては危険性を含んでいる。それは、仁政が行われなければ当然世の秩序が乱れる、ということと表裏の関係にあるからで、実際に「民は邦之本」条目を受けて、美濃の国の百姓が代官の悪政を訴えようと大勢で江戸へ向い、代官の使者が熱田まで追いかけて説得して留める、という事態も起きた(注33)。また、飢饉は単なる天変地異によ

る避けがたい悲劇ではなく、商品の流通過程に原因があるところとえられるようになっていた。寛永の京都の様相を描いた『福斎物語』(別名「寛永飢饉鼠物語」)は、「米国土にみち／＼て有ながら」の飢饉を、大名領主らによる米の買占め・占売りが元凶だと指摘する。そのような批判の矛先は、当然幕府の監督責任へと向かうことにもなる。延宝・天和期にも飢饉は頻発しており、都市部に大量の「貧人」が流入するような現象も顕在化していた。『本朝二十不孝』や『懷硯』刊行直前の時期にあつて、「飢饉は人災」という意識は高まりつつあつたと考えられる(注34)。

それに対して、幕府は情報収集には努めるが、それを公開することなく隠蔽と偽装とに腐心する。一方では厳しく行政改革を行い、役人の勤務査定を行いつつも、その一方で、あたかも「仁政」が既に実現されているかのような幻想を流布させる。そのような欺瞞的なキャンペーンの一環が全国への忠孝札の設置であり、孝子の表彰であり、孝子伝の刊行であつたのであり、やがてそれは「生類憐れみの令」へとつながっていく。

優れた君主が、従順な民を本として、国を確立させているという建前の明示。ここに一種のナショナル・アイデンティティの萌芽を見出すことができるとはいえないだろうか。もちろん、これは本稿で扱いきることなどできない大きな問題である。しかし、ナショナル・アイデンティティの確立は、幕末の黒船到来以来だといつかつての思想史の常識が、近年は蘭学・国学の

確立期まで遡るようになり、さらに近世初期の商業資本主義確立期に既に見出せるとの見解も示されるようになった(注35)。

話を西鶴に戻すならば、虚妄であり幻想である「仁政」に對峙するかのように、『本朝二十不孝』や『懷硯』の各説話は、疲弊し秩序の乱れた諸国の集合体を浮かび上がらせているといふことができる。もちろん、「仁政イデオロギー」が一つの国家像―ナショナル・アイデンティティに近いまとまりを見せているのに對し、西鶴のものは、読み手が各説話をモザイク状に組み合わせるにつれて後に浮かび上がってくる、不安定であまいな総体にすぎない。とはいえ、危険な、いわば際どい話であることは確かである。なぜあえてそのような作品を書くのかといえば、名人は危うきに遊ぶではないが、それ自身が書く喜びであり、読者の期待するものでもあったという他はない。

先に「戯作説」について触れたが、西鶴については、戯作という語を「毒にも薬にもならない笑い」と狭めて把握するのはなく、むしろある種の毒気、危険性をこそ読者は求めていたと考えるべきであろう。冒頭で野間氏の、綱吉にたいする抵抗・反発説を示したが、それとは異質な、個人的な憤慨や義憤を超えた透徹した作家意識が西鶴にはあったように思える。

欺瞞的な「仁政」と對峙しようとする西鶴。このような前提に立つことが、従来の西鶴研究が陥りがちな、典拠探しや同時代の常識との共通項探しといった袋小路から脱出するため、一つの方策ではないか。これが本論文の結論である。

注

(注1) 暉峻康隆『西鶴 評論と研究』中央公論社 昭和二三(一九四八)年。

(注2) 野間光辰『西鶴年譜考証』中央公論社 昭和五八(一九八三)年。

(注3) 野間光辰『西鶴と西鶴以後』『岩波講座 日本文学史』卷十 近世 昭和三四(一九五九)年。

(注4) 野間光辰『西鶴の転向―西鶴第五書簡をめぐる』『文学』昭和四一(一九六六)年一月号。

(注5) 藤野恵「発刊の辞」『日本諸学』創刊号・昭和一七(一九四二)年四月。

(注6) 「いま思うこと―文反古・胸算用と関連させて―」『完訳日本の古典53 万の文反古 世間胸算用』月報 昭和五九(一九八四)年 ただし、「某博士」が西尾実を指しているかどうかは確認できていない。

(注7) 松田修『日本近世文学の成立』法政大学出版局 昭和四七(一九七二)年。

(注8) 谷脇理史『西鶴の自主規制とカムフラージュ 一応の総括と今後の課題』『西鶴と浮世草子研究』第一号 笠間書院 平成一八(二〇〇六)年六月。

(注9) 尾形仿「ぬけ風の俳諧」『俳諧史論考』桜楓社 昭和

五二（一九七七）年。

（注10） 野々村勝英「談林俳諧の寓言論をめぐって」『国語と国文学』昭和三一（一九五六）年一月号。

（注11） 中野三敏「前期戯作の方法―寓言と戯作と―」『国語と国文学』昭和四六（一九七二）年一〇月号。

（注12） 長谷川強「西鶴をよむ」笠間書院、平成一五（二〇〇三）年。勝又基「不孝説話としての『本朝二十不孝』、木越治編『国文学解釈と鑑賞別冊 西鶴 挑発するテキスト』至文堂・平成一七（二〇〇五）年三月。

（注13） 谷脇理史「『本朝二十不孝』論序説」『国文学研究（早大）』三六号、昭和四二（一九六七）年三月。後に『日本文学研究資料叢書 西鶴』有精堂・昭和四四年、『西鶴研究所説』新典社・昭和五六（一九八一）年に再収。

（注14） 篠原進「二つの笑い―『新可笑記』と寓言―」『国語と国文学』平成二〇（二〇〇八）年六月号。

（注15） 『中村幸彦著述集 第二巻 近世的表现』中央公論社・昭和五七（一八八二）年。

（注16） 矢野公和「『本朝二十不孝』論―アイロニーとしての孝道奨励について―」『国語と国文学』五〇巻六号、昭和四八（一九七二）年六月。

（注17） 箕輪吉次「『本朝二十不孝』の背景その二元的世界」『学苑』五四一号、昭和六〇（一九八五）年一月。

（注18） 大久保順子「『本朝二十不孝』跡の剥けた嫁入長持」論―「評語」の表現をめぐって―『文化』平成四（一九九二）年三月。

（注19） 篠原進「『本朝二十不孝』―表象の森」『青山語文』二九号、平成一一（一九九九）年三月。

（注20） 杉本好伸「へ八百屋」の構図―『本朝二十不孝』の創作意図をめぐって―『鯉城往来』六・七、平成一五、一六（二〇〇三、二〇〇四）年。

（注21） 有働裕「『本朝二十不孝』論序説―『本朝孝子伝』と諸国巡見使を視野に入れて―」『国語と国文学』八三巻一〇号、平成一八（二〇〇六）年一〇月。

（注22） 有働裕「『懷硯』研究史ノート（3）―近年の『懷硯』論と今後の課題―」『国語国文学報』六〇、平成一四（二〇〇二）年三月。

（注23） 若尾政希「『太平記読み』の時代―近世政治思想史の構想―（平凡社選書193）』平凡社、平成一一（一九九九年）。

（注24） 多仁照広「江戸幕府諸国巡見使の観察報告―『九州土地大概』について―」『日本歴史』三二四号、昭和四九（一九七四）年七月。

（注25） 『本朝孝史伝』今世部「二七 鍛匠孫次郎」には、母親思いの鍛冶の孫次郎が、貧困の中で母親を気遣い、母親の死後も日々墓に詣でていたことを、細川綱利公

が聞いてこれを憐れみ、俸禄を与えたとする。「寛文初年国主細川公諱ハ綱利具ニ此ノ事ヲ聴テ之ヲ恤レミ之ヲ賑シ卒ニ乃彼ヲシテ其ノ旧業ヲ棄テシメ俸ヲ城府ニ受ケシム。」

(注26) 注21の拙稿参照。

(注27) 巻四の四「本に其人の面影」は、そのような『本朝二十不孝』にあつて例外的な一章と言える。この章については、拙稿「『本に其人の面影』考」『本朝二十不孝』巻四の四に描かれた不孝」『国語国文学報』第六五集（平成一九（二〇〇七）年三月で詳述した。

(注28) 箕輪吉次「『懷硯』と『近代艶隠者』」巻二の四「鼓の色にまよふ人」の作者をめぐって」『学苑』四九

四号 昭和五六（一九八二）年、同「懷硯の素材と方

法」『学苑』五一〇号 昭和五七（一九八二）年。井口洋「『懷硯』一面——誰かは住みし荒屋敷」の主題——『叙説』二三号 昭和六一年（一九八六）年。

(注30) 拙稿「『懷硯』試論——伴山存在と共鳴し合う当代説話——」『国語国文学報』第六一集・平成一五（二〇〇

三）年三月参照。

(注31) 平林香織「『懷硯』における話のネットワーク」『長野県短期大学紀要』五二号 平成九（一九九七）年。

(注32) 注22と同。

(注33) 「揖斐記」徳川林政史研究会蔵。『岐阜県史』資料編

近世二（昭和四一（一九六六）年）所収。また、『岐阜県史』通史編 近世下、第十六章（布川清司執筆分、昭和四七（一九七二）年）参照。

(注34) 菊池勇夫『近世の飢饉』吉川弘文館・平成九（一九九七）年。

(注35) 前田勉氏は「いわゆる「西欧の衝撃」以前に、すでに近世日本のなかに、「日本人」というナショナル・アイデンティティの可能性が全くなかったとはいえない」とし、そうした「日本人」というナショナル・アイデンティティの可能性は、近世の兵営国家を内側から突き崩す力とともに生まれてきた」のであり、「近世日本の兵役国家を内側から崩壊させていったのは、貨幣経済・商品経済の進展であつた」と述べている。前田勉「兵学と朱子学・蘭学・国学——近世日本思想史の構図——（平凡社選書225）」平凡社 平成一八（二〇〇六）年。

（うどう ゆたか）